

小樽市立西陵中学校存続を訴える会と小樽市教育委員会による
学校適正配置にともなう意見交換会
会 議 記 錄

- <日時場所> 平成24年1月23日／19：00～21：20／稲北コミュニティーセンター
- <出席者> 会長 萩田尚正・北村幸一・松倉仁美・河口靖誉・岩田博吉 他13名
- <市教委> 教育部長山村幹雄・副参事笠原啓仁・主幹荒木 邇・学校教育課主査干場 諭
- <オブザーバー> ◎北野 義紀・佐々木 秩・千葉 美幸・小貫 元・鈴木 喜明
◎安斎 哲也・松田 優子・中島 麗子（以上市議）<敬称略>
- <主催・記録> 小樽市立西陵中学校存続を訴える会

（◎印は会議記録の署名人）

<司会者> 開 会

議会の特別委員会のなかで「双方よく話し合うように」との提案を受けての開催です。主催は小樽市立西陵中学校の存続を訴える会。今回は地域懇談会とは違う位置づけで開催します。進行は一問一答型と指名型を併用し、会議が進まない場合に司会者が調整し進行させます。会議記録の署名人は安斎議員（会議提唱者）、北野議員（特別委員長）とします。

<会長 挨拶>

「和を以て貴しとなす」といわれています。これは議論を避け、長いものに巻かれること、妥協することを善しとするのではない。論争することが「理（ことわり）」を明らかにする。「理」を見出すことで「和」を見出すという哲学がある。和と論争は矛盾するものではなく、それどころか、論争のないところに和というものがあり得ないと考えています。論争・議論とは、あげ足を取るとか、言いたい事だけ言うのではなく、その基本的ルールから逸脱している。大切なことは他人の意見に耳を傾ける。そして批判を受ける。その批判に対して反論を述べる。こうした議論のルールを紹介し挨拶とさせていただきます。

<教育部長 挨拶>

本日のような設定は喜ばしいことです。今の話の通り、意見を交わして少しでもよいものを作っていくたいと本心から思います。

市内小中学校の子供が一番多い時は昭和33年で4万人を超えていました。H23年度10月現在8316人で5分の1程度になっています。H29年推計では7,123名で、今年より1,200名程度減少する見込みになります。小樽市の年間出生数は、13年前のH10年間で1,022人でしたが、23年一年間を見たら688人となっています。この学校再編において、市教委はそうした観点から学校の規模、配置のあり方について市民皆様と一緒に考えながら、といったスタンスがあります。今日も市民的議論をしていただき、前向きな、建設的な方向に進むように願っています。

▼市教委の説明と代表者説明・質問 ▼

<副参事> 基本計画・ブロック別再編プラン・他 資料に基づき説明

<訴える会 代表者意見・質問>

まず、旧石山中学校跡地の件ですが、「現在、鎖が掛かっていて、草がぼうぼうと生え、防災避難場所としてどうなっているのか」聞いてほしいと言われました。統廃合プランに対し意見を聞いている時に、市のホームページでは「学校跡地の利用」についての広報があり、素案であるがアップすることは少なくとも防災ではなく、売却を意味するものであり、不満です。この点について市議の皆様は承知しているのかと思いますので、後で代表して北野委員長にコメントを頂きたいと思います。

私たちはこの西陵の問題で、学校のことだけではなく、配置のバランス、学校のもつ地域の意義、進め方の公平性の問題をあげ「西陵中の廃校はおかしい（存続）」ことを目的としています。その点、学校PTAとは少し違います。私はその位置に学校がないこと、西陵校区が4分割されることをもって廃校と言っています。いつも「まだ決まっていない、廃校になるとは言っていません」と言われているので、西陵PTAは睡眠状態で、何回説明会をしたところで感じ取れていません。

もちろん地域の人も知らされていないので、全く知らないと断言できます。

私たちの意見書にも書きましたが、(前回の特別委員会で小貫議員が質問し、有効であると答弁いただいた)昭和48年の旧文部省通知の件ですが、ここには「統廃合にあたっては、学校の地域的意義等も考えて、十分に地域住民の理解と協力を得て行うよう努めること」となっています。そこには地域住民と書いてあり、PTAとは書いていません。私たちも12月に議会に提出したばかりなので、(地域での話し合いは)まだ始まっていないと認識します。また、西陵PTAからは、市P連、教育委員会と事業のつながりがあり、「今は何も言えない」とのことを聞いています。言わば、身内の関係とも思えます。

この旧文部省通知の中には「学校規模を重視する余り、無理な学校統廃合を行い、地域住民との間に紛争を生じたり…(略)は避けなければならない」となっています。この「無理な」というのはご存知でしょうか。この当時、国庫負担の高さが無理な学校統廃合を誘発させたということです。つまり、建築のことです。その後、国は形として国庫負担を下げています。地域住民との理解なくして、新たな統合学校を先に作るな、といった意味合いがあります。当然、このことは公務として従わなければならないと思います。

国が建築を先にするなと言っても、最上小への移転に関して、どんどん話を進めています。小学校を中学校サイズにするには、菁園中で約20億なので、例えば5億とか10億と仮定して、改修、移転して、そのあとで廃校するといった選択肢はありますか。小樽市の財政から考えても、私は費用がもったいなくて、それは不可能と考えます。菁園中が新しいから残り、松ヶ枝中はさらに新しくする。(3校を2校にする場合に) そうすると西陵中の残る確率は何パーセントですか? 最初から0パーセントの確率では公平なルールとはいえません。

(当地区ブロック再編資料P5にありますが)「松ヶ枝中の移転を決めて、一定の期間を置いてから3校を2校に決める」と書いています。それは、建築を先に決めて、合意を後にすることで、旧文部省通知とは全く反対です。小樽でも過疎債があり、どんどん建てようとする背景があるが、旧文部省はそれをやめなさいと言っています。また、学校再編ニュース1号(H23-3)にあるが、すでに西陵中に知らないまま、緑小、最上小、松ヶ枝中の3校の会議が行われています。その見出しには「松ヶ枝中の移転について話し合いを進めています」と書かれています。どうして建築を先行するのか疑問であります。

(当地区ブロック再編資料P15参照) 5つもプランがありながら、菁園中が確実に残るプランは4つ、松ヶ枝中が残るプランは1つあります。これから検討するプランなのに、どうして西陵中だけ残るプランがないのでしょうか。(結果として)西陵が残る、残らないは関係ありません。いくつもあるプランの段階で、どうして排除するのでしょうか。プランに挙がらなければ、比較もできず、話題にもなりません。西陵中の残るプランを是非作っていただきたい。

今回の特別ルール(改修、移転決定した後、一定の期間をおき、3校を2校に決める方法)やプラン(排除)においても公平性を欠き、まったく「公」を感じることはできません。こうした事を、市職員がやることに疑問を抱きます。誰がこの案を作ったのか。私たち訴える会は、この作った人と直接、議論をしたいのが正直なところであります。

(当地区ブロック再編資料P14参照) 教育委員会ではプラン4を適切としています。ひとつは統合菁園中392名です。現菁園中は10年後推計では90名以上の生徒が減少しますので、わかります。もう一つの統合松ヶ枝中は254名となっていて、1クラス28名です。H32年の推計生徒数(平成20年ベース、市教委配付資料から)では、現松ヶ枝中は35名も減り、統合松ヶ枝中のクラス平均は24名であります(7クラス規模)。小樽がよいとするクラス30名にも満たない。これを実行するには、市教委は1クラス24名ルール(当ブロックの下限設定216名~)を作らなければならない。この大事業はH36年に完結しますが、途中のH32年には、お金をかけて新しいものを作ったが、24名以下で成り立っていない。(※統廃合の適正規模は北海道では35名、小樽では30名をよいとし、さらにこのブロックの低い下限設定の250名にも満たなくなる意)これはおかしいと思います。

松ヶ枝中の隣の向陽中を含む南小樽ブロックをみると、H32年度推計で、向陽中と潮見台中合わせて約270名で成立し余裕はない。つまり、この潮見台・向陽・松ヶ枝の校区でいえば2校は成立しない事がわかります。私たちの意見書では、(意見書P4~P6)この周辺地区は3校、4校が重なることをサークルで示しています。サークル、つまり距離からいっても、人数からいっても重なるのはおかしい。配置バランスを考えブロック化したのに、それを考えたら配置が崩れている。

どこかで修正しなければならない。その（意見書 P6）サークル図を見てわかる通り、西陵校区の半分は独自のエリアを持っています。街中から学校を排除して、どうしてそこに密集させ、残す地域の意義がありますか。先にふれた旧文部省の通知でも、「学校の地域的な意義」を考えなさいと書かれています。私たちは、西陵のもつ駅周辺の地域的意義を随分書きました。おそらく、他のブロックでも泣くような叫びで、学校のもつ地域の意義を考え、残してほしい気持ちを訴えていると思います。ある市議から両方の意見を聞きたいとの話を受けています。松ヶ枝中に関しても、ぜひ、その意義を語ってもらいたい。

一番言いたいことは、特別なルールをつくり、西陵のプランを外し、旧文部省の通知に反し、建築を先にして外堀を埋める不公平なこと。お金をかけて出来上がったものは、基準に満たなくなるクラス数であることをどう説明するのですか。今後は1クラス24名学級（214名～、7クラス）に修正しない限り、このプランでの話合いは進まないと考えます。

<訴える会 代表者意見・質問>

（市ホームページでの学校跡地利用の件で質問がありました）

今日これだけの資料を配って説明しているが、皆すぐに理解できるのかと思う。基本計画の中で「みんなの合意ができてから実施計画を進める」と書いてあるが、この中央・山手地区で合意ができたと考えていますか。以前、西陵PTA会長と私と、そして教育委員会の方を交えて話し合いをしましたが、西陵PTA会長は「居住地によりさまざまな意見があり、PTAとしては意思統一ができず、こうした趣旨の場所には出たがらない」と言っていました。

パブリックコメントと称し、行政で何かをする時に、市民の声も聞いて進めると言っていたが、最初の基本計画を作るのに、市内40数校あるが、たった9つしかないと書いてあったが、これでパブリックコメントになるのか疑問である。

プラン1～5まであるが、青園中は新しいから最優先で残ることになっている。小学校の児童数であるが、稲穂小は355人、花園小は188名。ところが中学校では青園中が多くなっているのに気が付く。また、この地区では富岡中（現保健所）、石手中、そして西陵中もなくなるのはおかしい。青園中は（合併で）、かなり広範囲になってきて、校区も色々な町名に広がり、かなり校区割りがおかしくなっている。また、昔から考えると西陵校区にも食い込んできている。稲穂（町）、色内（町）は全て西陵中に入れてもらいたい。適切といわれるプラン4を見ると、色内、稲穂地区はほとんど青園中に行くことになるが、この増加に転じている色内地区、比較して人口減少の少ないのに（この地区の人が）どうして遠くの学校に行かなければならぬのか、適切と言いながらひどい話である。西陵中に関して言えば、緑1・2丁目なども西陵校区に考えられるのではないか。青園中を残すとしたら西陵中ではなく、松ヶ枝中を振り分けることも考えられる。新たな学校なんか必要なく、緑小も、昔、大きな沼でボートを浮かべていたところに移転する予定だが、最上小をそのまま利用し、花園小のエリアを広げ、そして松ヶ枝中を振り分けるのが、（既存の建物の活用からいうと）常識的ではないか。

<質問>

▼ 以降 質疑応答 ▼

突然、小学校の再編プランで「最上を改修して、松ヶ枝を移転する」となっていますが、松ヶ枝中は（耐震がなく）古いので、以前からなくなると聞いていたが、どうして突然そうした案が出てきたのか。

<教育部長>

その前に、先ほど学校の跡地利用の件でHPに出ていたことですが、あくまでも市民の考え方を聞くということが市の考え方にある。学校として使わなくなった場合は、教育委員会の財産ではなく市の管轄になります。教育委員会が学校編成の話をしている時に次のステップに移っているということの誤解は解消して頂きたい。

昭和48年9月に出された旧文部省通達については十分承知しています。以前、旧文部省は昭和31年に学校統合について通知された。市町村合併のなかで学校統廃合をする時代背景があり、勢いあまって住民との軋轢となり、無理した統合が見られ、それに伴い昭和48年にこの旧文部省通達がでした。地域の方とよく話して無理な統合をしないで、というダメ押しの確認である。市議会にも再三出しており、教育委員会もこの通達が活きていると確認しています。

再編プランを5つ出しましたが、プラン6、7はないかとの事ですが、こうした意見交換会、地域懇談会を通じて、通学区をこちらに広げられないか。境界を変えたらという議論が深まる中で、次のプランが出てくるのではないかと思います。

35人学級を目指すということが、この計画を逸脱するのではないか、といった話の中で、35人学級といえば基本計画の中で北海道の中で、少人数学級実践事業で道教委の制度として事業がある。学年を限定したこと。小樽でもあるが、ただ基本計画の中で、一律35人学級を決めて目ざすことはうたっていない。学校との都合で色々な規模、クラスができると思う。

子供の減少は上下変動があり、全ての地域において減っているわけではなく、例えば色内町のようにマンション建設によって子供が増えているところもあります。ひとつの尺度を持ってクラスの人数を決めるということになりません。結果、20数人学級も考えられる。一般的にも通学区によって考えられます。

パブリックコメントの件であります、確かに少なかったのですが、行政手続き法改正に伴って小樽市の採用している制度で、1ヶ月程度の期間を定めています。適正配置に関してはこの制度も利用し、市議会の特別委員会も設けていますので、そこでも進めていきたいと考えています。

<質問>

旧文部省の通知を理解しているのはわかりました。しかし、守っていませんね。建設が先で、「移転してから考えよう」ということは順序が逆であります。すごくお金をかけて立派にして、24名学級ですか？私は、点在した位置とか、既存の学校を使って24人学級なら、まだ仕方がないと思えます。

それでは、西陵中も24人学級でもよいですか。

(▼問答が合わない)

<教育部長> この部分で理解の相違があるが、ひとつクラスの人数は、国では40人以下でクラスを作れる制度になっています。今回の学校再編の中で、学年のクラス数が1学年2または3クラスのクラス替えによって、少ない人数での勉強の仕方、いくつかのクラス数によってのさまざまな効果（が生まれる）として考えている。その事だけを捉えると一面的な見方になってしまう。

<〃質問>

理解できません。松ヶ枝中が24名学級（216名～）とするならば、（同ブロックで隣接する）西陵中もそれでよいですか、という質問です。

<教育部長>

（統合）松ヶ枝中が何人編成になるかという計画ではありません。・・・・・・

<〃質問>

西陵中も（適用）可能なのか、どうかの質問です。

<教育部長>

その地区の通学区や人数によってはそういう事もあり得る。クラス編成上、異様な形だと思っていません。

<会長 意見・質問>

この問題の議論の方向性を誤ってはいけないと思う。私が一番疑問に思っているのは、なぜこのブロックで3校を2校にしなければならないか、といった基本的なところです。例えばブロックプラン資料P5の<統合の組合せの考え方>の表題部分に書かれている「全ての小中学校が再編の対象・・(略)」こうした記載を何気なく読んでもしまうが、私は、3校は3校のままでいいのではないか、と言いたい。冒頭の説明は少子化から始まり、少子化が基本的根拠として語られている。それで、教育委員会の基準で、望ましい学級は1学年2・3学級といわれている。ひとつの考え方として決して否定しませんが、ひとつの価値観である。私は反論致します。1学年2学級以上が望ましい。その根拠は少子化だからである。もともと3学級以上が望ましかったのかもしれません。しかし、減って2学級以上になった。それは少子化である。こういう意見を持っているが、反論してほしい。価値観が変わったことに反論してほしい。それに対して、これは文科省、道教委が決めた事である、との主張が推定されます。それに対して、誰が、いつ、どういう形で決めたのかを問いたい。したがって3校を2校に減らすという前提で議論してもこの問題には乗れません。したがって、プランをどうすることは、私の観点と論点が噛み合っていないのです。そうなると松ヶ枝中を残すのか、西陵中を残すのか、といった狭い領域に入るので、私はそういう考え方を持っていません。3年前（西陵中PTA会長時）に私は市議の前で、松ヶ枝中を直さなければならないと申し上げました。その時に、無くしたらどうするのですか。と言ったことがある。

私は発言には責任を持っていましたので、松ヶ枝中も残すことに賛成しています。ですから3校は残さなければならぬと想っています。

私が、これを言うと多くの方や塩谷の方から、とてもなく批判されますが、敢えて言うと、塩谷は仕方がないだろうと考えています。少子化ということが免れないだろう。このまち、小樽の発展、衰退化を防ぐには街の中に収束して人が住むという構想を進んで実現しなければならない。その時に、街の中に学校がなくなつてはどうするのでしょうか。絶対に人は住まないです。若い人が住まないまちづくりは絶対にありません。そんな街に将来はありえないと想っています。それを考えたら、西陵中を無くすることは賛成できません。そういう観点から考えると、このプランは理解できません。

<教育部長>

今回の学校統廃合のスタンスでは、中学校の場合で1学年3クラス以上です。中学校の学校構成を考えると、教員の人数はクラス数に関係があります。どちらかというと学科、指導の部分で、豊富な人材は中学教育に必要です。端的に言うと、中学の場合6クラス（2クラス×3学年）の場合では、教員の人数配置制度として10名です（校長は除く）。9クラスになると15人になる（同）。平成20年の段階で、中学の教員は200名強いますが、（専門教科としての）本免許を持たない先生も他の教科を教えなければならない事態が1割以上になっています。当然、道教委に届け出を出しています。全部の時間数ではないが、教員の数によっては窮屈な状態になっています。9教科あり、複数の免許を持っている先生もいますが、一定の規模がある方がよいと考えます。再編計画では、クラスの人数も最低何人以上とは定めていません。30人程度は目指すとあります。

<質問>

同ブロック内では同じ（人数・クラス数の）ルールを使いますよね。 （▼問答が合わない）

<教育部長>

人数ありきで均等にしてブロック分けをしているではありません。通学区域の広がりもあり、ブロック、ブロックで規模の違いは出てきます。

<質問>

住んでいる地域住民として言わせてもらう。この計画は教育委員会の話の内容だけではなく、これから的小樽市全体の流れ、まちづくりの一環としてなされるべきです。それを考えてやってきたのでしょうか？話を聞いていると、教員が何人、クラスが何人といったテクニック（制度解釈と数の分配）の問題で、配置換えなどはいくらでもできます。そういう問題ではなくて、街の真ん中の学校がひとつ無くなるという事は、将来の小樽にとってどれだけの影響があるのかをデータとして出して、それで市民を納得させなければならない。私は母校がなくなる悲しみで言っているわけではなく、この構想が根本的に、市の将来にどれだけ影響を与えるのかです。それが全然議論されてなくて進められていることに疑問を感じている。ここを説明してほしい。つまり、市教委としての見解、そして小樽市としてはこう考えている、といったことを一市民として聞きたい。

<教育部長>

教育委員会ですので、学校のあり方についてどうするのかが出発点であります。その中で少子化なので学校規模がこれまでいいのかという事がある。機械的にある程度の規模を決めて線を引き、規模の縮小、校舎の新しい・古い、投資費用、通学、環境、などを考えています。小樽市の財政問題も入ってきます。改修などは全く（財政を）無視するわけにはいかないと思っています。そういうことを兼ね合わせて考えています。中心部に学校が減るという事では、当然、他の地域もあります。中心部の学校がはたす役割は、また違った意味があります。その点こうした意見交換会を続けていかなければなりません。学校の再編は一緒に考えていかなければならない大きな課題である。

気になる点がありますが、「建設を先に決めているのではないか。だから、このブロック再編については最終段階ではないか」といった意味合いの質問を受け取ったのだが、その点については基本的に実施計画をつくる段階が決定になります。その後、統合に向けての準備に入ることになります。今こうして合意形成の場で、例えば西陵の関係者だけ遅れているのかといえば、このブロックの中では本格議論に入っていない学校もありますから、それについては引き続き行ついかなければならない。決まったのか、決定寸前なのかと言うと、逆にこれからである。プランの例示もありましたから、先ほどの話は押さえておきます。

＜質問＞

教育委員会の方も、以前は建築、市街地活性化、企画との仕事に携わってきた人も多いのだから、まちづくりの視点でも考えて行うべきではないですか。意見書で示したが（主に）中央地区と（主に）山手地区の人口推移を見ると明らかである。中心市市街地は国から補助を受けたりして基盤作りをやっている。市教委の話ではクラス数、生徒数、教員の話だけをしているが、やはり小樽の将来を考えながら、地域の声を聞きながら再編をしていくべきです。しかし、（地域の声を）聞くと言いながらつくったものを押し付けるような感じがします。

＜〃質問＞

旧文部省通知にもありましたが、建築の話を先に進めないことを確認していいですか。

＜教育部長＞

建築を先に進めないとは、一般的に、具体的な建設設計画も進めないということ・・・・

＜会場複数＞最上小学校の事

＜〃質問＞

ここでは資料に書いてある通り、最上小学校のことです。この建築を進めないということを聞いています。

＜教育部長＞最終的に地域の合意はできたとは考えていません。

＜質問＞

最上小に移転させるというのはどの段階まで進んでいるのか。現状はどうなのか。

＜意見＞それは、それで、いいのではないかと思う。松ヶ枝中学校を改修しなければならぬのは必近の課題もあるので。

＜質問＞

小樽の歴史、人口動態、コミュニティー、都市計画を考えた場合、小樽の発展は鉄道の歴史がはじまりで、手宮からの色内駅、小樽駅周辺と発展してきた。市教委が出されたプランではどのプランも西陵が残るプランがない。中心部から学校を排除していいのかどうか市議会議員の方にも考えて頂きたい。

＜北野市議＞（司会者が指名致しました）

冒頭でコメントを求められたので答えますが、その前にまだ質問に答えていない部分がありました。そのあとで発言します

（前出の質問：松ヶ枝中は（耐震のなく）古いので、以前からなくなると聞いていたが、突然、最上小学校を改修して移転させることになった。どうして突然そうした案が出てきたのか。

＜副参事＞

教育委員会の考え方として、プラン自体は議論を深めて一定の合意を得られればということで作っています。全て決定した事ではありません。最上小学校と緑小を統合するという考え方があり、その場合の位置として、最上小も緑小も考えられるが、緑小が古く耐震補強して使うという事にはなりません。プランの一つとして建て替える方向で考えている。現地で建て替えもありましたが、違う地域懇談会で「場所を変えて建て替えては」と言う意見があり、そうなったのが事実です。そこで小学校をつくると最上小校舎が空き、昭和60年頃の建物ですから、松ヶ枝中移転も考えられるのではないか、そういう経緯からです。

＜質問＞

前回（12月）の特別委員会を傍聴し、最上小を新築するということで（新築という言葉を使って、議事が）進んでいましたが。

＜副参事＞

中学校に必要な形に改修して、と書いてありますし、必要最低限度に改修するということです。私の方からは特別委員会の答弁でも必要な改修ということでお話しています。

＜質問＞

（意見書のP4の図で）もし西陵がなくなったらということで、サークルが描いています。石山中もなくなりました。ブロック、ブロックと言って考えているが、この配置バランスは悪いのではないか。この図をみてどう考えますか。

<副参事>

前回の特別委員会で安斎議員にも聞かれましたが、サークルが（半径）0.94kmで引かれています。もともと遠い通学距離は3kmとなっていますので、はたしてこれがおさまるのかシミュレーションしてみなければならない。

<上記に対しての説明発言>この部分は西陵のことだから西陵校区サイズで書いています。そういう事もあり、意見書には3サイズでサークルを載せています。

<〃質問>

質問はバランスがよいですか、と聞いています。

(▼問答が合わない)

<副参事>

統合校をどこにするのかと言う事で先ほどから繰り返している通り、いただいた意見を踏まえながらみなさんで議論を深めていきたいと思います。合意できる部分をさがしていきたいと思います。

<会場複数>バランスが良いかに答えていない。

<司会者> そろそろ時間が迫ってきますので北野市議お願い致します。

<北野市議>

今、皆さんから出された意見は、多くの特別委員会の議員が聞いています。これから議会の審議の参考にさせて頂きます。ありがとうございました。

最初に、パブリックコメントの問題、学校跡地の利用についてですが、これは見解が各党によって違いますから、最大公約数で結論の出ていることだけ申し上げます。議長から「市総務部が大事な問題を全く相談なしでホームページにアップしたのはけしからん」ということで注意をしています。私は学校適配の担当委員長なので、総務部長から「その点は申し訳ない。本来はきちんと説明してからやるべきでした」というお詫びの説明がありました。この問題については、教育委員会がやっているのではないかといった誤解があります。やはり、本来、誤解を生むような事はパブリックコメントで聞くような段階ではないし、そういう重要な問題は、もう少しあとでもいいと考えています。今日の意見交換会でも出ましたので、担当者に伝えておきます。

<会長>

ありがとうございました。簡潔に申し上げます。西陵中学校の存続を訴える会は、組織として（提言としての）統一した見解があるというわけではありません。今日集まってくれた人も、一人ひとりの意見が異なります。ただひとつ共通点があります。それは「西陵中学校を残してほしい」この1点です。その1点を心に留めて頂きたいと思います。

<司会者> 閉会